



50-3
夏期講座特集
1980.8

伊勢市古市町
東洋編集部
百万石

初参加夏期講座

石古 範和

何かを求め高尾山へ。
高尾の山は、夏にもこのように肌寒い日があるのかと思われずすし、所でした。その夏期講座の2日目、私の子真がみえばんにはめられたのであります。その子真といふのは、私の家族親せきを撮ったものでした。一週間は前から時間をかけて大切にやいた子真は「一言の批評もつけず、それとほうほうに家族を子真かほめられたのであります。十津川まで足をこめて撮影した子真は見向きもせず、自分の家のなかで撮影したものがほめられるなんて子真とはなんと交際なものでしょう。被写体が身近なものであったので、自分自身の気持が出ていたのかも知れません。子真の対象物はどこにもあることを知りました。」

それから、視点大賞の小島さん石橋さん方の撮影上の苦勞を聞いて、勉強すること、自分自身をみかくことの大切さを知りました。またそれと共に子真が社会の流れに心を配っていることにも気づきました。私はこれから常に勉強し、自分自身の眼を子真の方向へ向け、子真だけではなしに自分の自身の成長の場として、子真をとっていきたいのであります。

来年こそ是非参加します。

（後記）平本よりハガキ来た。七月は事情があつたので子真が来た。しかし子真はアツだけかものという、まのわけはやめにして8月に頑張ります。と力強い燃えっぷり。そして益アンさんが松線を火天で4時間巻いてフィルム20本を撮った由、手交の近況まで報せてくれた。9日の午後、高尾の帰りに清水さんと訪ねた。仕事と中止してニコニコと迎えてくれる。梅酒をのめという。えん豆を喰えという。どうもこしとたべよという。みやげにカキメとササゲと、それがら畑で赤くなったトマトを世間受けみんなどうも天人の労働。忙しければ邪へしてよかった。

私の夏期講座

中西 篤行

「夏期講座は、集団の創造と運動の原点である。視覚も、聴覚も、現代写真研究所も、この夏期講座の中から醸成されてきたものであった。」

十四回目をむかえた今年の夏期講座で、そんなことが話し合われた。

三重支部に入って二三年もすると、なにか子真というものが見えてきたような気がしてくる。あるいは「子真」というものなにか見えないものである、ということか見えてきたような気がしてくる。「子真の腕も上がり、きついものはよりきつく、やわやわなものもそれなりにしなやかになる。さらに、超ワイドや超望遠を駆使して、どうもないものまでよりきつく、しなやか、技術を獲得する。現像は目をつむっていてもできる。試し焼きなしで、サツと美しいプリントを作ってみせる。だがそうしたときが来たのである。「原点」を見失うのである。「初心」をも忘れてしまつたのである。

土門拳「子真作法」の中に次のようにならがある。「……問題は、なぜ初心を忘れるかにある。つまり馴れるから。初心を失うとは馴れることだ。馴れないとは恐れとほばらうを持つことだ。何事によよ、生まれて初めての経験に臨むように臨むことだ……」



「……夏期講座は僕にとつて、いつもこの「原点」乃至「初心」に立ち帰らせられる場所だと感じている。参加するものはすべて、まず自分に対する情熱で、誰にも負けない、という人たちがかりである。あのぞと、その情熱に圧倒されてしまう。押しつぶされそうになる。「その創りのエネルギーのすさまじいことを思い知る。しかしここで逃げたらあつた。情熱に対しては情熱でもって闘う以外はない。相手のすさまじい情熱に、自己のありたい情熱をぶつつけたとき、「その創り」と「その創りの」のエネルギーが生まれる。由緒のエネルギーはその衝動を通じて脱殻していく。「子真の創造」といふ一点で衝突した二つの個性は、個々別々にその魂の中に新たな「純物質」を生み出して高尾の山をのびるのである。その時僕はとも清々しい気分になっている。それはきっと、明日からの子真創造への新たな創造意欲を告げられるにちがいない。まるで、「生まれて初めて」「子真の創造」に立ち向かうような気分……」



潮は流れるもんよ

風は吹くもんよ

そして筏は本部のものなんよ